

「一音のおよぶところ」

学長 伊藤 洋

柳田國男の『遠野物語』に津波で死んだ妻と再会した夫の話があります。主人公は入り婿の福二。ある夏の深更、厠に立つと霧に覆われた海面に一組の男女が現れます。女は先の大津波で死んだ妻。彼女の傍らに立つ男は福二が婿に来る以前、妻が愛した恋人でした。「あの世でこの人と再婚しました」と妻が告げます。「残っていた子供たちがかわいくないのか？」と尋ねる夫に、妻はただただ泣くばかりでした。

明治三陸大津波は、幸薄かった女に淡い幸せを持ってきてくれたのでしょうか。それとも、これは嫉妬に狂う夫の邪念だったのでしょうか。逝く者と残る者の心の深奥をこの物語は語っています。はたして、今次の東日本太平洋沖地震による大津波ではどんな福二がいたのでしょうか。

2011年6月、ユネスコは、岩手県平泉の中尊寺・毛越寺他5資産を世界文化遺産に登録しました。これは東日本震災で打ちひしがれていたみちのくに何よりの朗報でありました。奥州藤原氏三代の栄耀に輝き、西行が二度訪れ、義経の悲劇に芭蕉が涙した平

泉。この文化遺産登録は、大量死を悼むに相応しい配慮でありました。中でも藤原清衡が「中尊寺供養願文」に誓った浄土欣求の想いはまさに

撰取不捨「生きるものすべての救済」を祈願したもの。この未曾有の不幸を前にして、これしかないという程の遺産です。

この願文の中に「二階の鐘樓一宇廿鈞の洪鐘一口を懸く」として、次の文章が添えられています。

「右、一音の覃ぶ所千界を限らず。苦しみを抜きて楽を与え、普ねく皆平等なり。官軍夷虜の死事、古来幾多なり。毛羽鱗介の屠を受くるもの、過現無量なり。精魂は皆他方の界に去り、朽骨は猶此土の塵と為る。鐘声の地を動かす毎に、冤霊をして浄刹に導かしめん」。

簡約しておきましょう。「この鐘の音は全宇宙に向かって鳴り響き、全てのものに平等に、苦を除いて楽を与える。朝廷派遣の官軍ばかりか敵の死もまた古来無数。殺された獣・鳥・魚・貝等の動物もまた無数。これらの魂はみな他界したというものの、その骨はまだこの地に残っている。この鐘の鳴る度に大地を揺るがして、その魂を西方浄土へ導きたまえ。」

この鐘によって平成の福二の妻ら1万9千余の死者の全てが「浄刹」に導かれんことを祈ります。